

第四章・マラカンドへの攻撃

「ハボック」を呼び、戦争の犬を解放して。

ジュリアス・シーザー 第三幕・第一場

夜間の激しい攻撃に対する抵抗は、軍隊が実行を求められる中で最も困難な仕事である。あらゆる国の兵士は長い間そう認識してきた。そうした状況ではどんな勇敢な兵士にも耐えられないようなパニックが一瞬のうちに起こる。多くの勇敢な兵士が動転する。経験豊富な将校の多くが、逃亡兵の群れに気圧され無視される。戦場で死地を果敢に行軍してきた連隊は、即座に恐怖に陥り、役に立たなくなる。

マラカンド・キャンプへの攻撃では、危険と混乱のすべての要素が見られた。驚き、闇、混乱して破壊された存在の根拠／未知の数の敵／彼らの容赦ない凶暴性／ぞっとするような状況がすべて存在していた。しかし、その危機に対処できる兵士たちがいた。警報が鳴るとすぐに、王立人道協会の金メダルの保持者であり、アフガニスタンとインド辺境での長い経験を持つ第四五シーク隊のマクレー中佐は、守備隊宿舎に駆け寄った。そして七八人の兵士を集め、彼らと同じ連隊のテイラー少佐の指揮下にブッディスト・ロードに送り、敵の前進を妨げ、阻止しようとした。そして急いで別の数十人を集め、バーフ中尉にさらに大勢を動員するように指示を残し、小さなパーティーでテイラーの後を追いかけてコタルキャンプの入り口の峡谷の方向へと走った。カル平原から二本の道路がマラカンド・キャンプに通じている。二本のうちの高い方のブッディスト・ロードはある地点で狭い隘路を通り、鋭い角度で曲がっている。ここか他のどこで敵を阻止できるか、少なくとも軍の戦闘準備が整うまで時間を稼げる可能性がある。マクレー中佐はその時二〇人ほどになっていたパーティーを率い、テイラー少佐を追い越して、迅速に道を下った。それは数百人の命がかかったレースだった。もし敵の軍勢が角を曲がってしまったなら、誰も彼らの突進を阻止することはできず、抵抗しようとした者はバラバラにされるのだ。シーク隊が最初に到着したが、ごく少数数であった。角を曲がった途端、千人近い敵の大軍と出会った。彼らは主に剣とナイフで武装しており、静かにこっそりと峡谷を忍び寄り、キャンプに突撃してその中のすべての生命を虐殺することを目指し、確信していた。道路全体に荒々しい軍勢が殺到していた。マクレーは直ちに発砲した。致死的距離からの一斉射撃に次ぐ一斉射撃が密集した敵に浴びせられた。その後シーク隊は自由に発砲した。これによって怒りに叫びわめく敵の進軍は阻止され、差し当たり停止させられた。兵士の小隊はその後、ペースを落として絶え間なく発砲しつつ角の後ろ約五〇ヤードの切土斜面に陣取った。側面は左側を高い岩、右側を岩と暗闇の中では移動することが不可能な荒れた地面に守られていた。道路は幅約五ヤードであった。部族民は角を曲がるとすぐに撃ち倒された。心強い陣地であった。

その隘路で千人を三人でうまく足止めできるかもしれない

こうして部族民は進軍を効果的に阻止されたため、左側の丘に登り、進路を妨げる兵士に岩や石を投げ始めた。彼らは角を回り込んでライフルを発射したが、自分自身をさらすことなく兵士を見ることができなかつたので、弾丸のほとんどは右側にそれた。

シーク隊は切土斜面にびっしり詰まっており、前列は射撃のためにひざまづいていた。ほとんどすべての兵士に石や岩が当たった。偉大な武勇を示したテイラー少佐は致命傷を負った。数人のセポイが死亡した。マクレー中佐自身も誤って銃剣を首に刺し、血に染まった。しかし、彼は「ラトレイのシーク隊」(*一八五六年トーマス・ラトレイが創設したエリート部隊)の名声を守り、死ぬか連隊が現れるまでその陣地を確保するようにと兵士を叱咤した。そして兵士たちは、大音声のシークの雄たけびと、敵の進軍に対する抵抗で応えた。

二〇分間の必死の戦いの後、バーフ中尉が三〇人の兵士と共に到着した。彼は辛うじてギリギリで間に合った。敵はすでにマクレー中佐の右翼に回り込んでいたため、生き残った数人の兵士は窮地に陥っていた。援軍は丘の斜面を登って敵を追い返し、側面を守った。しかし連隊の残りはもう近くまで来ていた。マクレー中佐はその後尾根の延長線上、道路の上約五〇ヤードの位置に戻り、バーフ中尉の隊を強化して、夜間のすべての攻撃を撃退した。午前二時ごろ部族民は前進を諦め、多くの死者を残して撤退した。

この事件で示された精神の存在、戦術的な知識、勇氣は、メイクレジョン准将による公式のディスプレイでこのように報告されている……

「膨大な多勢に対し、峡谷の中でこの小さな組織が連隊の残りが到着するまで勇敢に抵抗することにより、その方面からのキャンプへの突撃を防いだことは間違いない。私はこのときのマクレー中佐とテイラー少佐の行動をどれほど称賛しても足りることがない。」

右翼がこのように経過している間、敵の別の攻撃はより多くの成功を収めていた。キャンプは三方面を同時に攻撃された。照明弾の輝きが北キャンプも交戦していることを示していた。敵はマクレー中佐と第四五シーク隊によってブッディスト・ロードで阻止されていたが、別の大集団の男たちがグレーデッド・ロードから中央を目がけて押し入ってきた。最初の発砲音で第二四パンジャブ歩兵隊の小哨は道路と峡谷の歩哨を二倍に増やした。しかし圧倒的な数の敵の中に陥つていくことによく気が付いただけだった。何百人もの獯猛な剣士たちがバザールとそれに隣接する小さな囲い地であるセライの中に群がった。

狙撃手が周囲の丘に這い登り、そのうちでもとりわけゴツゴツした岩に覆われたジブラルタルと呼ばれるピークから途方もない銃火を放ち続けた。

左方面と中央またはキャンプの防衛は、第二四パンジャブ歩兵隊に委ねられた。この連隊の一つの中隊はクリモ中尉の指揮下にサッカー場を横切って突撃し、銃剣によってバザールを掃討した。このときの光景は鮮烈で恐ろしいものであった。バザールは部族民でこつた返していた。大声で気合をかけてまっすぐ突撃する兵士たちは、怒り狂う敵に銃剣を突き刺した。剣で叩き切る音、不幸な店主の叫び声、ガジたちの叫び声が絶え間ない小銃射撃の響きに重なってはつきりと聞こえた。今や敵はバザールの中へ強引に戻ろうとしたが、中隊が入り口を守り、一〇・四五頃まですべての攻撃に耐えた。その時中隊の左側面が回り込まれて圧力が非常に強くなったので彼らはより内側の防衛線に引き戻され、「工兵隊の囲い」の端に沿って陣取った。別の中隊が北キャンプとの連絡路を守った。連隊の残り第五中隊すなわち工兵隊は戦線のあらゆる部分に加勢する準備ができていた。

それぞれの中隊の実際の動きを詳細に記録する必要はあるが、私は何よりも読者に大略を理解してもらうことを切望している。敵はマラカンドの大カップに東側からアクセスする二つの道路から途方もない強さで攻撃をかけた。彼らは右側の道ではマクレイ中佐の素晴らしい動きと連隊の勇氣によって阻止された。しかし圧倒的な力を注ぐことによって左側の道からキャンプに突入し、すべての抵抗を排除した。リムの延長線を保持することができなかった防衛側はカップの底の中央の位置へ追い込まれた。この中心的な位置は、「工兵隊の囲い」、兵站部ライン、野戦工兵隊の敷地で構成されている。すべての方面で縁からの火力が支配権を握っていた。窮地に立たされた防衛側は自分の場所を守るためにあらゆる犠牲を払う決意を固めていたが、それは悪しきことだった。

その間、敵は蛮勇と闇雲な怒りをもって攻撃に殺到していた。生命知らずの彼らは細い防衛線に向かって突撃した。そして二度も突破を成し遂げ、囲いを突き進んだ。そこで彼らは自分たち同様の大胆な兵士たちに出会った。死に物狂いの戦いになった。將軍自らが点から点へと急行し、兵士を激励して剣とリボルバーで防衛に加わった。敵は兵站部ラインに侵入するとすぐに略奪と犠牲者を求めて兵舎と倉庫に突進した。

隊の兵站將校マンリー中尉は頑なに持ち場に固執し、ハリントン軍曹と一緒に自分の住む兵舎を守ろうと努めた。獐猛な部族民がドアを破って部屋になだれ込んだ。その後のことはロマンスを読んでいるようである。

中尉は即座にリボルバーを発砲した。彼はたちまち切り倒され、バラバラにされた。格闘でランプが壊れた。漆黒の闇が部屋を覆った。軍曹は襲撃者を倒し、ひとたび自由にな

って、壁に向かって身動きせず立った。マンリーを殺した後、軍曹を探して部族民は今や壁伝いに手を伸ばし、暗闇の中を手探りし始めていた。結局誰も見つからなかったため敵は軍曹が逃げたと結論し、他を探すために飛び出していった。数時間後に兵舎が再奪取されるまでハリントン軍曹はそこに留まって救助された。

別の激しい攻撃が守備隊宿舎に対して行われた。工兵中隊とともにそれに立ち向かったワトリング中尉はガジを剣で刺し貫いた。しかし狂信者は怒りのあまり死に際して中尉を切りつけ重傷を負わせた。中隊は撃退された。守備隊宿舎は占領され、工兵隊の予備弾薬が奪われた。ワトリング中尉は部下に運ばれて仮包帯所に着くと、すぐにこの重要な持ち場の喪失を報告した。

メイクレジョン准将はすぐにそれを敵から奪回することを第二四隊に命じた。防衛線のどこにも予備の兵士はほとんどいなかった。ようやく小さいながらも献身的な一隊が集められた。それを構成していたのは約二人／ホランド大尉、クリモ中尉、マンリー中尉（技術部隊）、准将の当番兵、第四五シーク隊のセポイ、二―三人の工兵、および第二四隊の三人の兵士であった。

准将は自らをリーダーとした。将校はリボルバーを抜いた。兵士は銃剣のみを使用するよう指示された。そして彼らは進んだ。地面は元々起伏が多く、異常なほどにごちゃごちゃしていた。大岩、起伏、木がすべての動きを困難にした。多くのテント、小屋、その他の建物のため複雑さが増した。そうした環境の中に多数の重武装した敵がいた。二人は突撃した。部族民は彼らに対抗して前進した。将校は拳銃で敵を次々と撃ち殺した。兵士たちは銃剣で突いた。敵は戦闘不能となって引き揚げたが、部隊の半分は死傷していた。当番兵は射殺された。第二四隊の工兵とハビルダー（*インド軍曹）は重傷を負った。准将自身は剣で首を打ち据えられた。幸運にも攻撃者の手の中で武器の向きが変わったため打撲傷で済んだ。ホランド大尉はテントに隠れていた男に近距離から背中を撃たれた。弾丸は四力所を傷つけ背骨をかすめていた。部隊は今では数が減りすぎて何もできなくなった。生存者は動きを止めた。クリモ中尉は負傷した将校を収容し、第二四隊からさらに二人の兵士を集めて攻撃に戻った。守備隊宿舎を取り戻すための二回目の試みも失敗し、兵士たちはさらなる損失を被って後退した／しかし、敗北を受け入れないその不屈の精神で彼らは努力を続け、三回目の突撃で開放空間を疾走し、敵を打倒し押し返して守備隊宿舎を回復した。ただし、すべての弾薬は敵によって運び去られていた。その夜の損害はすでに莫大であったがそれはさらに重大な損失であった。兵站部ラインからはようやく部族民が排除された。動員可能な守備隊員は囲いの南の入り口を塞ぐ急拵えの防備を作り上げ、敵に奪取される可能性のある調理室や他のシエルターを除去するために用いられた。

翌朝調理室の周り、三回の突撃が行われた開放空間で二七人以上の部族民の死体が見つかった。おそらく二倍の人物が負傷し、這い逃げたことを思い起こすならば、これにより守備隊宿舎における戦いの死に物狂いの性質を推し量ることができる。

この間ずっと、リムからカップにかけての火事は深刻で継続的な損害を引き起こしていた。敵は囲い地を三方向から取り囲んで防側を十字銃火によって圧迫し、胸壁まで頻繁に突進して来た。弾丸が全方向に飛び交っており、避難できる所はなかった。副次官補のハーバート少佐は夜の早い時間に被弾した。その後ラム中佐は太ももに危険な傷を負い、数日後に死に至った。多くのセポイも殺され負傷した。第二四パンジャブ歩兵隊の指揮は、準高官であるクリモ中尉に委ねられた。しかし連隊にとって事態は好転しそうもなかった。

およそ一時頃、発砲の小康状態の間に囲いの東面に並んでいた中隊が弱々しく助けを求め、叫びを聞いた。第二四隊の負傷したハビルダーがバザールの近くに横たわっていた。彼は最初の攻撃で肩を撃たれて倒れていた。部族民は彼を死なせるために剣で二―三度深く切りつけ、死ぬものと思つて放置していたのだ。彼が今助けを求めていた。彼が横たわるサツカー場には銃火が吹き荒れ、敵の剣士が群がっていたが、助けを呼ぶ叫びは無視されなかった。第二四パンジャブ歩兵隊のE・W・コストロ中尉は二人のセポイを連れて致命的なスペースに走り出し、激しい銃火をもともせず負傷した兵士を安全な場所に移した。彼はこの英雄的な行動によつて後にビクトリア十字章を受けた。

夜になるにつれ、敵の攻撃が激しくなつたので准将は砦の守備隊に一〇〇人の兵士の増援を要請することにした。この堡壘は丘の上に立つており、野砲を装備していない敵に対しては難攻不落であった。到達を試みる命令にローリンズ中尉が志願した。彼は三人の従卒を伴つて出発した。敵が横行する非常に荒れた地面を通り抜けなければならなかった。一人の男が飛びかかつて彼の手首を剣で打ったが、リボルバーで射殺された。彼は無事に砦に到達し、切望されていた増援部隊を連れて戻つた。

アフガニスタンの部族が通常するように、敵は夜明け前に囲い地を占領するための最終的努力をすると予想されていた。しかし彼らの損害は甚大であった。そして午前三時半頃に死者と負傷者を運び去り始めた。それでも射手たちが高所へ後退し、一斉射撃が減少して遠距離からの「狙撃」に移る午前四時一五分まで射撃は弱まらなかつた。

マラカンド・キャンプ防衛の最初の夜は終わった。敵は不意打ち、位置取り、多勢という利点をすべて備えていたが貧弱な守備隊に勝利を収めることはできなかった。あらゆる場所で彼らは完敗して撃退された。しかし、英国側の損失は深刻であった。

イギリス軍將校

名誉の戦死
L・マンリー中尉、兵站部
危険な負傷
W・W・テイラー少佐、第四五シーク隊
重傷
J・ラム中佐、第二四パンジャブ歩兵隊
L・ハーバート少佐、副次官補
H・F・ホランド大尉、第二四パンジャブ歩兵隊
F・W・ワトリング中尉、工兵隊
ラム中佐とテイラー少佐は負傷により死に至った。

現地兵

死亡…………… 二二
負傷…………… 三二

朝の最初の光が谷に伸長し始めるとすぐに第二四隊の二個中隊が前進し、敵が略奪のためはまだ残っていたバザールを掃討した。その場所全体が徹底的に略奪され、価値のあるものはすべて破壊されるか運び去られていた。現地人の店主は誰も羨ましがらないような奇妙な経験をしていた。英国軍の弾丸と同様の敵の剣に対する危険と恐怖の夜の間中、彼はテントの後ろに隠れ、取り残されていた。敵意のない声を聞いて、彼は避難場所から無傷で現れた。

部族民による散漫な発砲が終日続いた。

このように緊迫した決死の戦闘が南キャンプで猛威をふるっている間、北キャンプは激しく交戦しておらず、不安ではあるが静かな夜を過ごしていた。コタルでの発砲音が聞こえると第八山岳砲兵中隊の四門の砲がキャンプの南東側に移動し、何発かの照明弾を発射した。しかし、敵の大きな集団は発見されなかった。部族民は夜間に二度キャンプに接近してきたが数発の榴散弾で十分追い払うことができた。

メイクレジョン將軍は北キャンプの駐屯部隊が激しく交戦していないことに気づいた。そこでギブス少佐の下に二門の砲と第三一パンジャブ歩兵隊からなる部隊を編成し、第一一ベンガル槍騎兵隊の四〇人の騎兵の援護を受け、第二四隊の側面部隊に支援されつつ、出動して谷を偵察し、できる限りの敵を掃討するべし、という命令を出した。縦隊は追撃しつつベッドフォード・ヒルまで進出した。ここで彼らは部族民の大集団に出くわし、大きな部族的蜂起が起こったことが明らかになった。そこでギブス少佐は引き返して装備と部隊を遅滞なくコタルキャンプに移動させるよう命令した。歩兵隊と砲は撤収し、第二四パンジャブ歩兵隊に護られているキャンプまで退却した。

この連隊が撤退中にブッディスト・ロードの上の高地から中隊の左側面に向けて突然の攻撃が行われた。すぐに戦端が開かれ、第二四隊は攻撃者と交戦するため前進した。指揮をとるクリモ中尉は一個中隊を右翼に進出させ、この旋回運動によって敵にいくらかの損害を与え、旗を奪って撃退した。この退却時におけるこの将校のスキルと行動は、再びデイスパッチにおける称賛の対象となった。中隊は約一時間にそれぞれのキャンプに到着した。その間、騎兵隊は可能であればチャクダラに進軍し、その駐屯地の守備隊を補強しよう命じられていた。この任務は非常に危険なものであったが、スワット川を何度か渡ることによって戦隊は何とか部族民の間を通り抜け、わずかな損失で砦に到着した。この華麗な騎行については後の章でそのすべてを記述する。

北キャンプの避難は非常にゆっくりと進んだ。それぞれの中隊は非常に慎重に装備を梱包し、輸送の申請を行なった。しかし利用できる手段はなかった。すべてのラクダは山の向こう、インド側のダルガイにいた。急げ、との命令が繰り返しコタルから出された。温情主義の支配者の鷹揚さを信じていることができなかつたため、全ての者は所有物を置き去りにすることを嫌がった。午後を過ぎると、敵の様相は非常に切迫して手に負えないものとなった。大勢の男たちがキャンプに近づいてくるため野砲は数多くの砲弾を発射せざるを得なかつた。結局四時の時点で北キャンプをすぐに放棄すること、そこにいる部隊はコタルに退却すること、まだ移動していないすべての荷物と備品はそのままにしておくこと、という緊急命令が発せられた。

すべてのテントは攻撃されたが、何もできることはなかつた。そして、すべての将校と兵士の深い嫌悪とともにその財産は敵の慈悲に委ねられた。夜の間にはすべて略奪され、燃やされた。こうして将校の多くが所有する衣類を根こそぎ失った。破壊の現場から立ち昇る炎は広く遠くから見ることで、最も遠い谷の部族民ですら呪われた異教徒の虐殺の完了を急ぐよう鼓舞された。

しかし、中隊の集合が分別ある賢明な一歩であったことは疑う余地がない。コタルと南キャンプの守備隊は数が足りておらず、何があつたとしてもそれぞれの中隊と一緒に立ち上がった倒れたりする方が多い。ウトマン・ケル地域からの多数の部族民が現れ、キャンプの西側の丘に密集したことによって状況はまたさらに悪化し、守備隊は大幅に延長した防衛線を維持することを強いられた。敵に部隊の撤退を強いられていたため北キャンプの放棄は早すぎるといふことはなかつた。彼らは第二四パンジャブ歩兵隊とガイド騎兵隊の銃火に守られて南キャンプに到着した。彼らの後衛は一晚中行進した後、その朝の八三〇にキャンプに到着した。彼らにはやるべきことが沢山あつた。

電報はその夜にあったニュースを世界中のすべての地域に伝えた。イギリスではグッドウッド（*イングランド南部ウェスト・サセックス州チチェスターにある競馬場）の競馬レースから戻ってきた人たちが夕刊紙の貼り紙で戦闘の最初の詳細を読んだ。シムラのインド政府は目を醒ますとともにもう一つの重大な仕事に直面したことに気づいた。すべての将校に自分の連隊に帰らせ、道路と鉄道によって現場へ増援部隊を向かわせる電報が打たれた。二七日の深夜、機械が打ち出したニュースに肝をつぶして大慌ての電信技官がノウシエラの第一ベンガル騎兵隊の将校たちを起こした。興奮した目のシャツ一枚のこの男は、弾を込めていないリボルバーの銃口を掴み、走り回って全員を目覚めさせた。国中が沸き立っている。マラカンド守備隊は数千人の部族民に圧倒されている。すべての中隊はすぐに行軍するべきである。彼は受け取ったワイヤーのコピーを振り回した。しばらくして公式の命令が届いた。第一ベンガル騎兵隊、第三八ドグラ隊、および第三五シーク隊は夜明けに出発した。第一および第七英国山岳砲兵中隊も命令を受けた。ガイド騎兵隊はすでに到着していた。ロックハート中尉の二個歩兵隊は灼熱と息苦しい粉塵にもかかわらず一七時間半で三二マイルを踏破して、二七日の午後七時三〇分にコタルに到着した。この素晴らしい偉業は兵士の能力を損なうことなく達成された。兵士は哨兵線に送られ、到着とともに任務に着いた。ダルガイ駐屯地を指揮する将校は私にこう言った、世界で最も暑い太陽の下の二六マイルの行軍でさえもガイド隊を打ち負かせないことを示すが如く、彼らはそこを通過するときパレードのような精度で武器を揃えて担いでいた。それから彼らは一歩ごとに大きくなる銃火の音に励まされながら峠の頂きへの長い上り坂を登って行った。

こうしてたくさんの援軍ができうる限りの速度で近づいていた。しかしその間にも守備隊は孤立し、ありうる限り最悪の危険に直面しなければならなかった。北キャンプを最後に発った第三パンジャブ歩兵隊がコタルに到着すると、約一〇〇〇人の部族民が白昼に最大の大胆さで急襲して左側面を脅した。彼らは第二四隊の二つの哨兵線に攻撃をかけ、ぐいぐいと前進して来た。それに対抗するためクリモ中尉は二個中隊を率いて砲に支援されながら丘を登った。銃剣突撃は完全な成功を収めた。将校たちは十分な近距離からリボルバーを効果的に使用することができた。九人の敵が地表に残され、旗が奪取された。そして部族民は引き揚げ、守備隊は夕闇とともにやってくる予測される攻撃に備えた。

夕方近くなるにつれてかつてないほどの数の敵が集まってくるのが観察された。その大群衆がチャクダラ・ロード沿いに押し寄せ、丘の白い斑点が濃くなるのが見られた。彼らはみなまだ白を着ていた。このニュースはブナーには届いておらず、アンベイラの黒ずんだ装いの戦士たちはまだいなかった。北キャンプからの炎のまぶしさは、たちまち彼らを古来の敵への攻撃に駆り立てた。日が暮れたときの光景は奇妙で不吉ではあったが非絵画的ではなかった。周囲の丘にはあらゆる色、形の趣向を凝らした派手な旗印が翻っていた。

日没は、尾根と小尾根の後ろに剣のひらめきを捉えた。攻撃の準備のため忙しく動く大勢の敵の姿が見られた。狙撃手が降らせる弾の雨が相応に伴った。中央のカップの底には、「クレーター」キャンプとメインの囲いがあり、夕餉の煙が立ち上っていた。部隊が彼らの持ち場へ移動し影が長くなるにつれて、発砲は大きく絶え間ない咆哮へと膨れ上がった。

二七日の夜の中隊の配置は次のとおりであった。

一・右側面のマクレイ大佐は、第四五シーク隊とガイド歩兵隊一〇〇人に支援された二門の砲でブッディスト・ロードにまたがってほぼ同じ位置を保持していた。

二・中央では以下によって囲いとグレーデッド・ロードが防御された。

第三一パンジャブ歩兵隊

第五中隊 Q・O・（*女王陛下の）工兵隊

ガイド隊

二門の砲

三・左側面ではクリモ中尉の指揮下に、残った二門の砲を擁する第二四パンジャブ歩兵隊が放棄された北キャンプと砦の間の通路を保持した。

リムの大部分を占めるこの延長線のほとんどは哨兵線の連鎖で占められていたが、それは互いに切り離されており、後方支援を受けつつ石造りの胸壁で防備を固めていた。しかし、中央では「工兵の囲い」の古いラインで戦線が膠着していた。バザールは敵の手に渡っていたが、メイン塹壕の約一〇〇ヤード前にあるセライはサバダー（*インド大尉）・サード・アーメド・シャー指揮下の第三一パンジャブ歩兵隊の二四人からなる小哨によって保持されていた。ここでその夜、悲劇が起こった。

八時、部族民はすべてのライン沿いに途方もない力で攻撃をかけた。発砲はすぐに激しく連続的になった。中隊による弾薬の消費は非常に多く、何千発もの弾丸が射出された。右側面ではマクレイ大佐指揮下のシーク隊に対して剣士が繰り返し突撃し、その多くは哨兵線への突入に成功したものの、銃剣の餌食になった。二門の砲にたどり着いた者は砲兵を攻撃中に切り伏せられた。すべての突撃は撃退された。部族民はひどい損失を被った。シーク隊の死傷者も深刻だった。午前中マクレイ大佐は彼の防御から前進し、二門の砲火に守られて目前の敵を掃討した。

中央は再び激しい戦闘になった。部族民はバザールになだれ込み、セライを全方向から攻撃した。ここは、約五〇ヤード四方の泥壁の囲いだった。小銃射撃の銃眼があったが、

側面の防御機能はなかった。敵はその場所を占領するため数時間かけて奮闘する決意をした。一方、メインの囲いの中隊の火災は非常に大きかったため、セライに対する攻撃にはほとんど気付かなかった。その哨兵線は六時間にわたってすべての攻撃に耐えたが、側面の防御機能がなかったため敵が壁に近づくことが可能であった。そこで彼らは壁に抜け穴を開け、下へ潜り込んで来るようになった。小さな守備隊はあちこちに駆けつけ、これらの攻撃を撃退した。しかし、それはふるいの水漏れを防ぐようなものだった。ついに部族民は数力所からなだれ込み、中の小屋に火を放った。防御側が死亡または負傷して残りが四人になったとき、自らも被弾したサバダーは避難を命じた。生存者は負傷者を背負って背壁から梯子で逃げた。殺された者の遺体は翌朝異常に損壊された姿で発見された。

苦い結末に至るまでこの持ち場を守ったことは、見事な武勲と見なさなければならぬ。サバダー・サイド・アーメド・シャーは際立った勇敢な行為によって昇進した最初の将校となった。そしてこのときの彼の勇敢な行為は、デイスパッチにおける特別な一節の主題となっている。「サバダーと生き残ったセポイはこれにより「功勞勲章」を受け取った。」

左側面では第二四パンジャブ歩兵隊も激しく交戦しており、コストロ中尉は弾丸が背中と腕を貫通するという最初の重傷を負った。朝にかけて敵の圧力が強くなってきた。そこで常に大胆で力強い行動をする傾向のあるクリモ中尉は、二個中隊を率いて彼らに対抗するために胸壁から前進した。部族民は後退せず、マティーニ・ヘンリー・ライフルによって絶え間ない発砲を続けた。彼らはまた中隊の上に大きな石を転げ落とした。第二四隊は前進を続け、点から点、陣地から陣地へと敵を追いやって二マイルを行った。約一〇〇〇人の部族民に保持されていた「ギヤロウズ・ツリー（*首くくりの木）」の丘で最初の逆襲の突撃が行われた。そのような混雑した状態において隊の銃火は致命的であった。敵はクリモ中尉の逆襲の進路に四〇人の死者を残し、多くの負傷者を運び去ったことが観察された。彼らは退却すると多くがジャラルコットの村に逃げ込んだ。砲が急行し、一〇発の破裂弾を彼らの真ん中に投下して叩きのめした。この大胆な一撃の結果、戦いの休憩中の敵は日が差して軍の攻撃が可能になる前に常に丘から撤退するようになった。

こうしてマラカンド守備隊は部族民の猛攻撃を撃退することに再び成功した。多くの敵が殺され負傷していたが、周囲一〇〇マイルのすべての部族民が攻撃に急行しており、その数はただちに増加した。二七日の夜の死傷者は以下の通り……

イギリス軍將校

負傷 E. W. コステロ中尉

現地兵

死亡…………… 一二

負傷…………… 二九

日中、敵は疲れを取るためにカルの平原へと後退した。今や多数のブナヴァル族が集会に参加していた。守備隊はこの新来者が黒または紺色の服を着ていたため、スワット族、ウトマン・ケル族、マムンド族、サラルザイ族などと区別することができた。それぞれの隊は防御の強化とシェルターの改善に従事した。部族民は擾乱攻撃や忌々しい長距離射撃を続け、ガイド騎兵隊の馬を数頭殺した。夕方にかけて彼らは何百もの旗幟を運び、新たな攻撃のために前進してきた。

暗くなると正面全体に対する激しい射撃が再開された。敵は明らかに十分な弾薬を持っていて、隊の猛射に効果的に応酬した。連隊の配置は前夜と同じであった。右側面では、マクレイ大佐が再びすべての攻撃に対して持ち場を保持した。中央では、激しい戦闘が続いた。敵は囲いの胸壁まで何度も突進してきた。彼らは侵入に成功しなかった。しかし、三人の将校と数人の兵士が火災で負傷した。一時的に第三一パンジャブ歩兵隊に所属していたガイド騎兵隊のマクリーン中尉は素晴らしい危機回避を遂げた。弾丸が口に入り、骨を傷つけることなく頬を通過した。彼は勤務を続け、本書は数週間後のランダカイにおけるその悲劇的であるが栄光ある戦死を記録することになる。

フォード中尉は肩に危険な傷を負った。弾丸が動脈を切断しJ・H・ヒューゴ軍医将官が助けに来たが、失血により死に瀕していた。火は照明として使用するには熱すぎた。そこにはいかなる種類の遮蔽物もなかった。そこはカップの底だった。それにもかかわらず外科医は生命の危険を冒してマッチを擦り、傷を調べた。マッチは弾丸がバチバチ鳴ってそこら中にホコリを巻き上げているただ中に取り出されたが、その不確かな光によって彼は怪我の状態を見た。将校はすでに失血によって気を失っていた。医師は動脈をつかみ、結紮糸がないため銃火の中で三時間もの間、指先に人の命を握っていた。やがて敵がキャンプに侵入したように思われたとき、彼はまだ意識のない将校を腕に抱えて圧迫を緩めることなく、安全な場所に移した。その腕は動脈の圧迫に尽力した影響で何時間も麻痺し痺んでいた。

どのような視点や関心を持っていたとしても、この輝かしい献身的行為を称賛しない人はいないと私は思う。内科と外科という職業は常に人が選び取ることができ最も高貴なものとして位置づけられるべきである。医師が兵士たちの間で等しい危険と等しい勇気と共に行動し、他のすべての人々が命を奪い合っている場でそれを守り、他のすべての人々が痛みを起こそうとしている場でそれを和らげる光景は、神の目にも人の目にも常に輝かしいものと見えるはずである。人がこの世を去って、正体不明の冒険に乗り出した方が良

いようなどんな状況をも想像することはできない。

敵は一晩中攻撃を続けた。彼らはしばしば胸壁に達することに成功し――ただ防御者の銃剣で死ぬだけだった。砲は散弾を発射し、恐るべき効果を上げた。朝が明けたときその場所には帝国軍によってまだ保持されていた。夜間の犠牲者は以下のとおり……

イギリス軍将校

重傷――

H. B. フォード中尉 第三一パンジャブ歩兵隊

H. L. S. マクリーン中尉 ガイド隊

軽傷――

G. スウィンリー中尉 第三一パンジャブ歩兵隊

現地兵

死亡…… 二

負傷…… 一三

二九日の朝、チャクダラとの信号通信がしばらくの間再び確立された。その駐屯地の守備隊は自らの安全を告げ、大きな損失とともにすべての攻撃を撃退したが、弾薬と食糧の両方が不足していると報告してきた。日中敵は再び平野に後退して休息し、その夜に企てている大攻勢の準備をした。幸先は良かっただろう。その日はモハメッドが信仰のために死んだ人々の利益に特別な注意を払うジュマラットであった。その上、満月であった。偉大なファキールはこれが勝利の時であると宣言しなかったであろうか？ムラーは総員に最大限の努力を促し、攻撃を自ら率いると宣言した。今夜異教徒を完全に滅ぼすのだ。

その間、それぞれの中隊は恐るべき疲労にもかかわらず、防御を強化するために忙しく働いていた。バザーとセライは平坦にされた。木々が爆破され、中央の囲いの前に開けた射撃フィールドが得られた。敵が光に対してシルエットになり、兵士が襲撃者に良く狙いをつけることができるよう接近経路に大きな焚火が用意された。そういった仕事でその日は過ぎた。

部族民は遠距離からの射撃を続け、数頭の馬とラバを撃った。この狙撃手たちは大いに楽しんだ。チャクダラの救援後、その多くが岩の間に最も快適で効果的なシェルターを作っていたことがわかった。特に一人の男は巨大な岩の後ろに納まり、射撃時に身を守るために銃眼のある小さな石の壁を建てていた。張り出した岩は彼を太陽の熱から守った。その側には食糧と弾薬筒の大きな箱があった。ここで彼は一週間の間、キャンプに着実に弾丸を撃ち込み、将校がすべての「興味の対象」と表現したものを狙撃した。これほど魅力的なものが他にあるだろうか？

午後四時に、第一一ベンガル槍騎兵隊を指揮するスチュアート・ピートセン少佐が、その主要な戦隊と共に到着した。彼は少量の弾薬を持ち込んだ。毎晩の消費は莫大であり、一部の連隊は三〇、〇〇〇発の砲弾を発射したので守備隊は非常に必要としていた。リード大佐の指揮下の第三五シーク隊と第三八ドグラ隊は夕方、峠のふもとにあるダルガイに到着した。彼らは最も強烈な暑さの中で一日中行進していた。行進がどれほどひどいものであったとかは第三五シーク隊の二人の兵士が熱中症により実際に路上で死亡したという事実から判断されるであろう。これらの兵士が死ぬまで行進したという事実は、すべての階級の兵士が示した最前線に立つために、という軍人らしい熱意のもう一つの証拠である。メイクレジョン准将はその軍勢とともに持ち場を守ることができる確信があったので彼らにダルガイで停止し、翌日は休むように命令した。

夜とともに攻撃が始まったが、中心部の防衛は大幅に改善されており、部族民は囲いの前に広がった見通しの良い斜堤を全く通過できなかった。しかし、彼らは両方の側面を決意をもって攻撃し、あらゆる場所で発砲が激しくなった。午前二時に大規模な攻撃が行われた。正面全体に、そしてあらゆる側面に膨大な数の敵が攻撃に群がった。左右では、白兵戦が行われた。マクレイ大佐は再び彼の持ち場を維持したが、部族民の多くはライフルの銃口の下で死んだ。左の第二四パンジャブ歩兵隊が最も激しく交戦していた。敵は胸壁に侵入することに成功し、接近戦が起こった。コステロ中尉が再び重傷を負った。しかし、隊の銃火はその前で生存するにはあまりにも激しかった。二・三〇にマッド・ムラーが負傷し、別のムラーが殺され、数百人の部族民が殺され、すべての攻撃が崩壊した。そして勢い良い攻撃は二度と再開されなかった。敵は、マラカンドを取るチャンス逃したことを認識した。

二九日夜の犠牲者は以下の通り……

イギリス軍将校。

重傷―― E. W. コステロ中尉、第二四パンジャブ歩兵隊、

すでに重傷を負っていたが、義務を果たすために任務を継続していた

F. A. ウィンター中尉、王立砲兵隊

現地兵

死亡…… 一

負傷…… 一七

翌日、敵が彼らの村まで丘を越えて、死者を引きずり、負傷者を運んで行くのが見られ

た。増援が加わり、午後九時三〇分に彼らは攻撃を再開したが、氣迫に欠けていた。彼らは再び損害を被って撃退された。一度雷雨がキャンプを襲っている間に彼らは第四五シーク隊の持ち場に突撃したが、銃剣で追い払われた。夜間に負傷したのは二人だけだった。

朝、第三八ドグラ隊と第三五シーク隊がキャンプに入った。敵は遠距離から塹壕に発砲し続けたが、効果はなかった。明らかに彼らはマラカンドは強力すぎて奪取できないことに気づいていた。隊は静かな夜を過ごし、疲れ果てて精も根も尽き果てた兵士らは不足していた睡眠を少しばかり取った。このようにマラカンドのイギリスの辺境基地への長くて持続的な攻撃は衰え、終息した。この場所での完敗にうんざりした部族民は、彼らが必要と信じたチャクダラにエネルギーを集中した。この難局に陥った駐屯地を救援することが現在のマラカンドの守備隊の義務になった。

そろそろ終了するこの章は、詳細にそして必然的に長々と私たちの帝国の前哨基地の防衛について記述した。奇襲とそれに続く持続的な攻撃に対する抵抗がなされた。敵はあらゆる地点において撃退され、その試みを放棄したが、防御側を取り囲み注意深く監視している。軍は攻勢を取り、報復の時間が始まろうとしている。

七月二六日から八月一日までのマラカンド守備隊の死傷者は以下のとおり……

イギリス軍将校 死亡と負傷による死亡―三

- J. ラム中佐、第二四パンジャブ歩兵隊
- W. W. テイラー少佐、第四五シーク隊
- L. マンリー中尉、兵站部
- 負傷―一〇
- L. ハーバート少佐、副次官補
- G. ボールドウィン大尉、殊功勲章、ガイド騎兵隊
- H. F. ホランド大尉、第二四パンジャブ歩兵隊
- F. A. ウィンター中尉、王立砲兵隊
- F. W. ワトリング中尉、王立工兵隊
- E. W. コステロ中尉、第二四パンジャブ歩兵隊
- H. B. フォード中尉、第三一パンジャブ歩兵隊
- H. L. S. マクリン中尉、ガイド騎兵隊
- G. G. スウィンリー少尉、第三一パンジャブ歩兵隊
- C. V. キーズ少尉、ガイド騎兵隊

死亡、負傷した将校の総数—二〇

イギリス軍下士官 死亡
F・バーン軍曹、王立工兵隊

現地下士官および兵

	死亡	負傷
第八ベنگガル山岳砲兵中隊	〇	五
第一一ベنگガル槍騎兵隊	〇	三
第五中隊女王陛下下の工兵隊	三	一八
第二四パンジャブ歩兵隊	三	一四
第三一パンジャブ歩兵隊	一二	三二
第三八ドグラ隊	〇	一
第四五シーク隊	四	二八
女王陛下のガイド歩兵隊	三	二七

下士官と兵の死亡と負傷総数

—一五三